

特許情報分野の研鑽の場の在り方

— ISForum 特許分科会の活動から —

Study group for patent information

HIT サービス研究所 代表 **都築 泉**

PROFILE

1980年に丸善（株）に入社、その後、青山特許事務所、（株）KMK デジテックス、（株）ジー・サーチにおいて、それぞれ国内外の特許を含めた多様なデータベースサービスおよび調査実務等に関わる。2005年4月～2014年3月 大阪工業大学知的財産研究科准教授。特許情報分析研究会代表、ISForum 特許分科会運営委員長。理学博士。

✉ izumitzk@nifty.com

1 はじめに

筆者は、特許情報サービス関係の企業に延べ20年以上勤務し、また、大学で学生に特許情報を中心とした知財情報検索や特許情報分析について9年間講義や演習を担当した。その経験の中で、特に、特許情報は日々更新されるため、そのノウハウをできるだけ最新に保っていくことの重要性を常に痛感した。しかし、一人だけで情報を収集し最新のノウハウを学ぶことはなかなか難しい。やはり情報交換をする仲間は重要で、社外の勉強会は貴重だと実感する。そのためには、研究会や勉強会の活動に積極的に参加することは重要な意味を持つ。

関西を中心として活動している特許情報関係の研究会・勉強会は、首都圏に比べると数は少ないが、筆者がメンバーとして所属している、あるいは、何らかの形で関わっている関西圏の研究会・勉強会には、以下のものがある。

1) ISForum 特許分科会

情報検索全般に関わる検定試験として、社団法人情報科学技術協会（INFOSTA；Information Science and Technology Association）¹⁾ が行っている「検索技術者検定（旧：情報検索能力試験；データベース検索技術者認定試験）」がある。この試験の合格者の有志による勉強や情報交換の場として、関東圏ではサーチャーの会²⁾、関西圏ではISForum³⁾ が組織されている。ISForum 特許分科会は、このISForum に所属し、特許情報分野を中心として情報交換や勉強を行うための研究会である。今回は情報交換と自己研鑽の場としている

ISForum 特許分科会の活動を中心に紹介する。詳細は後述する。

2) 特許情報分析研究会（APIA；Association for Patent Information Analysis）

- ・開催頻度：毎月
- ・会費：無し
- ・メンバー：企業等での特許情報担当者を中心とする約13名。内、2名は大学院生。
- ・活動概要：2グループに分かれてそれぞれのグループリーダーのもと、年間の固定テーマを決め、特許情報・ビジネス情報を解析することにより得られる企業情報戦略、技術開発分析等を研究している。2014年9月現在、12月4日～5日にINFOSTAとJST（科学技術振興機構；Japan Science and Technology Agency）⁴⁾ の共催で開催されるINFOPRO2014⁵⁾ における研究発表を目指して準備中である。

3) 情報技術研究会

- ・開催頻度：2ヶ月に1回
- ・年会費：24,000円
- ・メンバー：企業の知財情報担当者を中心に約10社
- ・活動概要：メンバーにより輪番制の研究発表を行う（当番は1年～1年半に1回程度）。他に外部講師による講演会などが適宜開催される。各年度の前半は、通常の輪番制の発表と並行してグループ研究を行い、その成果を10～11月の宿泊研修会で相互に発表する。
- ・事務局（株）ジー・サーチ

4) パテントサーチャー研究会

- ・開催頻度：年4回程度
- ・会費：無し
- ・メンバー：特許調査に関わっている会社員、特許事務所、調査会社勤務者など。固定メンバー制ではなく、関心のある回のみに出席すればよい。毎回の出席者は10名程度。
- ・活動概要：日頃サーチャーの方々が抱えている課題を出し合い解決を図ることにより情報検索に関する知識と技術を高めることを目的とする。ほぼ毎回、協賛機関のアイ・ピー・ファイン社のスタッフからアジア特許情報のミニ講義や提供するサービスの簡単な紹介がある。毎回のプログラムに「サーチャーのための座談会」の時間があり（筆者が座長）、相互の情報交換の場となっている。現在は関西中心だが、今後、東京地区での開催も計画されている。
- ・主催：(株)サピエンティスト⁶⁾
協賛：アイ・ピー・ファイン(株)⁷⁾

2 ISForum 特許分科会発足の経緯

今回紹介する ISForum 特許分科会とは、INFOSTA の行っている「検索技術者検定(旧：情報検索能力試験；データベース検索技術者認定試験)」の合格者により組織され、関西圏で主に活動している ISForum という研究会に所属する分科会である。

INFOSTA は、1950 年に UDC 協会として発足し、その後、日本ドクメンテーション協会、情報科学技術協会と改称されるという経緯を経て、現在、千数百人の会員を擁し、情報検索分野において重要な役割を果たしている社団法人である。雑誌「情報の科学と技術」や情報検索に関わる書籍の出版、研究会活動、講習会・セミナーやシンポジウムの開催等の活動を行っており、情報検索に関わる者にとっては大変重要な機関である⁸⁾。

上記記載の INFOSTA の「検索技術者検定」(当時の名称はデータベース検索技術者認定試験)の2級は1985年から、1級は1986年から実施されており⁹⁾、試験の合格者の有志により構成される ISForum は1988年12月に発足した⁹⁾。

INFOSTA の歴史が示すように、ISForum のメンバーの関係する分野には、図書館情報等も含まれ、特許情報以外の分野にも大きく広がっている。そのため、特許情報に特に関わりのある者にとっては、別途、特許情報にターゲットを当てた情報交換の場が必要と思われた。そこで、特許情報に業務上何らかの関わりのあるメンバーが集まり、ISForum 特許分科会が結成され、第1回研究会は1997年12年に開催された。その後、メンバーチェンジやメンバー数の増減も経つつ、概ね13~15名程度のメンバーで約17年間活動を行ってきた。その間、停滞時期もあったが、会員諸氏の意志にささえられ、現在に至るまでもかくも活動を継続できており、これは大変嬉しいことだと思っている。

ISForum 特許分科会の活動の歴史を振り返ると、設立当初からの第1期、メンバー数減少等によりやや停滞し活動方針を転換せざるを得なかった第2期、その後活動を見直して積極的に新メンバー確保を念頭に活動しはじめた第3期とに分けられる。この間、多くのテーマが研究対象となったが、これらのテーマは、特許情報に関わる人たちが何に関心をもっていたか、の歴史を一面から切り取ったものとも言えよう。

ここで、それぞれの時期における活動内容を振り返り、反省も含めてここで紹介し、このような研究会の在り方についての方向性を検討する。

3 第1期の活動

3.1 活動の概要

ここで「第1期」とは、研究会の発足当初から2005年末の第47回研究会までとする。第1期の開催記録を表1に示す。

第1期のメンバー数は13~14名程度であった。この時期、特に30回ごろまでは、毎回の研究会への出席率も7~9割と比較的高く、活動も充実していた。この時期は、参加者名簿の管理等のごく基本的な事務事項のみは筆者が担当していたが、各研究会ごとの開催に関わる業務については、メンバーの持ち回りで担当幹事を決め、輪番制で開催の企画や会場手配、議事録の作成を行った。基本的には以下の方針に従って運営・開催されていた。

表 1 IS FORUM 特許分科会研究会開催記録—第 1 期

回	日時	テーマ
1	1997/12/12	インターネットで得られる特許情報
2	1998/2/12	商用特許データベースの使いこなしのテクニック
3	1998/4/9	CD-ROM 等の利用法
4	1998/6/11	検索結果の後処理
5	1998/8/20	特許公報類の早くて安い入手方法
6	1998/10/8	検索上で私が落ちた落とし穴
7	1998/12/10	各種分類の利用
8	1999/2/18	パテントマップあるいは依頼調査の報告のありか方
9	1999/4/9	調査の節約法 (料金、時間、その他)
10	1999/6/11	インターネットにおける特許情報 (その2)
11	1999/8/19	お気に入りのソフトの紹介
12	1999/10/14	プレサーチ
13	1999/12/9	特許関連ビジネス情報検索法の実践研究会
14	2000/2/10	最近の特許関連のデータベース動向について
15	2000/4/13	エンドユーザーと調査担当のよりよい関係のために
16	2000/6/8	特許関連の全文情報について
17	2000/8/10	特許情報検索で私が落ちた落とし穴 PART2
18	2000/10/19	法制度絡みの検索について
19	2000/12/22	IPDL の活用 (講師による)
20	2001/2/8	最近のシステムの変更点
21	2001/4/12	検索に関わるソフト—公報自動ダウンロード、後加工ソフト、通信ソフト等—
22	2001/6/14	特許調査に有効な周辺の情報
23	2001/8/9	特許調査に有効な周辺の情報 (続編)
24	2001/10/11	特許関連インターネット情報
25	2001/12/14	特許電子図書館活用のウラ技 (講師による)
26	2002/2/14	特許調査に有効な周辺の情報
27	2002/4/11	インターネット等の情報の先行技術としての扱い+ 新規性喪失の例外適用事例/セミナー参加報告
28	2002/6/13	特許調査で私が落ちた落とし穴 PART3
29	2002/8/8	特許調査で私が落ちた落とし穴 PART3(2)
30	2002/10/10	各国特許庁ホームページを用いた特許情報その1-USPTO を用いた特許調査
31	2002/12/13	USPTO ホームページの解析2
32	2003/2/14	効果的なプレ調査
33	2003/4/10	USPTO 関連
34	2003/6/12	USPTO もしくは ESP@CENET 関係
35	2003/8/8	特許調査に有効な周辺情報または「USPTO もしくは espa@cenet 関係」
36	2003/10/9	特許調査に有効な周辺情報
37	2003/12/19	37-IPDL・WPI・ATMS トピックス、韓国特許調査サイトの検証
38	2004/2/12	韓国特許庁 KIPRIS、その他アジア各国の特許 DB 徹底研究
39	2004/4/14	PATOLIS-IV 説明会
40	2004/6/24	JST および JOIS の最新情報 (JST スタッフ)
41	2004/8/5	新人に対する情報検索技術教育について
42	2004/10/7	espa@cenet について および JDreamPetit の説明
43	2004/12/16	espa@cenet の活用その他
44	2005/4/28	パテントマップ、特許庁/特許検索ガイドブックを検証する
45	2005/8/10	パテントマップ、特許庁/特許検索ガイドブック、各国特許庁の検索サイト
46	2005/10/25	WIPS の説明会 (テクノエージェンツ社スタッフ)
47	2005/12/13	JDreamII 説明会 (JST スタッフ)

た。

- ・開催は隔月
- ・研究会の開催担当幹事は持ち回り
- ・各回の研究テーマを決めて、原則としてそれに沿った資料を各自が用意して参加

開催場所は、ISForum の特定メンバーの方のご厚意により、ほぼ毎回同じ場所を提供いただいた。都合で会場をお借りできない場合には安い公共の会場を手配し、参加メンバーは各自 500 円程度の会場費を負担などした。

年に 1 回程度、研究テーマが Dialog 情報検索システムや ATMS 等のサービス紹介に関わる際には、これらのデータベースサービスの提供機関であり、また、当時、筆者が勤務していた(株)KMK デジテックス、あるいは(株)ジー・サーチのセミナールームで開催した。また、2004 年半ば以降は、しばしば JST 西日本支所をお願いして、場所の提供と当時サービスされていた JDream 検索システムやデータベース関係のニュース紹介をお願いした。特に、特許情報と科学技術文献情報を合わせて収録するデータベース JST PatM の登場により、特許情報と関連づけて興味深い話題も聞かせていただいたことを懐かしく思い出す。今は JST 西日本支所もなくなり、大変残念である。

3.2 研究内容

このころは、毎回、何かテーマを決めて、そのテーマに関連した資料を各自で用意して参加する、という形式が中心であり、各研究会の終了時等に次回のテーマを相談して決める場合が多かった。その中でも、特に比較的繰り返し取り上げられたテーマは以下のようなものであった。

- ① 各国特許庁ホームページで提供される特許情報 (USPTO、EPO、韓国等)
- ② 商用データベースの最新ニュース
- ③ インターネットで得られる特許および特許関連の情報
- ④ 検索手法

この第 1 期の研究テーマを種類分けし、その比率を図 1～図 3 に示す。図 1 は第 1 期の全体を対象とし、図 2 は第 1 期の前半、図 3 は第 1 期の後半を対象としている。

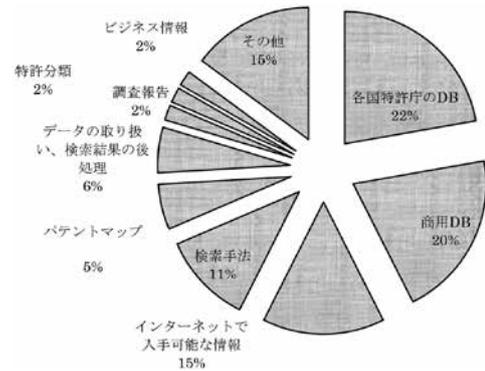


図 1 第 1 期の研究テーマ

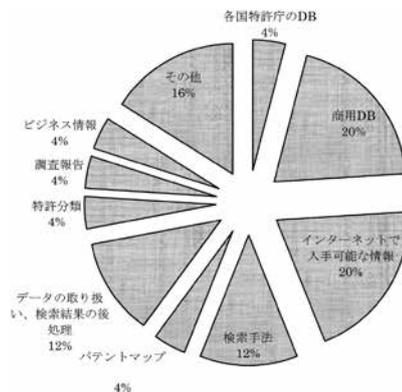


図 2 第 1 期前半の研究テーマ

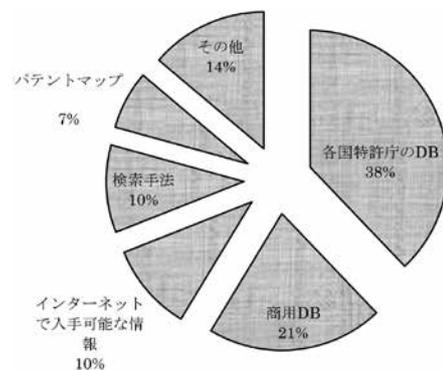


図 3 第 1 期後半の研究テーマ

これらの図は研究テーマをごく大雑把に主題別に分けたものであるが、各国特許庁の提供するデータベースは、この第 1 期を通じてしばしば研究対象として取り上げられたことがわかる。また商用データベース関係やインターネットを通じて入手できる情報の収集や活用方法は常に関心の高いテーマであった。また、前半では調査報告の在り方や特許分類等の基本的なテーマも取り上げられたが、後半ではこのようなテーマは殆ど取り上げられなくなった。基本的なテーマについては、ある程度の切り口が出尽くすとそれで区切りができ、その後は、変化の大きい Web 上の情報を中心に情報収集に努めてい



た、ということであろう。

3.3 第1期終盤時期の問題

2005年までの第1期、特に前半は大変充実しており、参加者にとっては貴重な情報交換の場であった。それまでの商用データベースを中心とした検索のみならず、各国特許庁のデータベースの利用が次第に盛んになり、情報交換の重要性も大いに増した時期でもある。

しかし、一方で、メンバーの中にも業務の変更や所属部署の異動等の理由で、退会せざるを得なくなったり、メンバーとして在席はしていても研究会に参加できなくなるなど、メンバーの状況変化により徐々に参加者数が減少した。やはり情報交換会・研究会として場所を手配し時間を割くことを考えると、5名以上程度の参加者は欲しい、と考え、研究会企画の段階で参加希望者があまり少ない場合には開催を見合わせることにした。その結果、以前は隔月に開催、年6回の開催であったものが、2005年には年4回の開催となってしまった。

これは退会する、あるいはメンバーであっても研究会に参加できなくなったメンバーが何名かでてきたこと、にもかかわらず、新人の加入はごく少なかったことによる。また、当時は会への加入条件が、ISForumのメンバーで特許情報に業務として何らかの関わりのある人を対象とする、という制限を設けていたことも門戸を狭める一因だったかと思われる。

4 第2期の活動

4.1 活動の概要

2004年までは、基本的に隔月に開催しており、2005年になってからは参加者がごく少なくて開催を中止した回もあったが、それでも年4回開催していた。しかし、全体として参加者が4～6名程度と少なくなり、しばしば開催を中止せざるを得ず、結果的に、2006年からは開催頻度は年に1回程度になった。特に、2008年の8月以降は、研究会は夏の暑気払いの懇親会を兼ねるものとなった。このころから、各回の研究テーマは特に統一せず、各自が他のメンバーに役立つであろうと思われる情報を持参して情報交換をする、「メ

ンバーによる小ネタ持ち寄りの情報交換会」の形式が中心になった。開催頻度は年1回で、午後3～3.5時間程度の研究会を行い、研究会の終了後、夕方から懇親会を行った。

こうなると懇親会の位置づけは相当重要なものとなる。極めて幸いなことに、メンバーの中に、大変優秀な「懇親会幹事」を担当してくれる方がいて、毎回、奇想天外なゲームの企画などをやってくれ、参加者は大いに楽しんだ。この優秀な幹事さんのお陰で、年1回、同窓会的に集まる形の会であってもなんとか継続できた、と誠に感謝している。仕事に役立つとはいえ、業務命令ではない研究グループの継続には、このような「お遊び精神」も時には重要な要素だと思ってしまう。

このころは、JST西日本支所がまだ大阪に存在したので、会場提供をお願いすることも多かった。JST関連のサービス紹介等の話題提供のみならず、セミナールームのパソコンを利用させていただくなど、いつもご協力いただき、大変ありがたく思っている。また、筆者はすでにジー・サーチを退社し大学勤務に替わっていたが、同社のサービスであるATMS/Analyzer等のサービス紹介を行う際など、場所提供と講師を担当していただき、有難いことであった。

このように、第2期は、いわば低迷期であり、何となく先細りの感が否めなかったが、それでも何とか年に1回、夏に集まってビールを飲み、懇親会の名幹事さんの卓抜な企画を楽しみに、会は続けられた。

4.2 研究内容

研究会に持参する内容・資料は、メンバーに役立つ情報提供であれば何でもよい、あまり準備に時間をかけずにできる内容でよい、としたので、研究会の内容は、それぞれが日常業務の中で気付いたちょっとしたテクニックや情報ツール、外部での研修報告などを持ち寄って情報交換する形で行っていた。第2期の研究内容を表2に示す。実際にはここに記載されていない多様な話題が話し合われ、目からウロコもあり、開催回数は少なかったが仕事の視野を広げることのできる貴重な機会であった。

表2 IS FORUM 特許分科会研究会開催記録—第2期

回	日時	テーマ
48	2006/4/25	IPC8 版にかかわる動き、その他
49	2007/2/2	esp@cenet による SDI サービス、ASP サービスによる商用 DB、その他
50	2008/3/27	JSTPatM について、JDreamII の強化点・改善点等の紹介
51	2008/8/22	マクロ解析等、特許情報の処理・解析に役立つ手法について
52	2009/8/7	中国、台湾、韓国特許情報—各国特許庁提供の DB、情報交換、その他
53	2010/8/12	J-Global の紹介 (JST 文献情報部)、情報交換、情報共有～大阪工大 SNS の利用
54	2012/8/30	PATOLIS の新サービス (パトリス社)、ATMS/Analyzer(ジー・サーチ)、情報交換

5 活動方針の転換

上記のように、2006 年以降は、ほぼ年に 1 回の開催で細い線で続いている形であり、メンバーの部署移動や退職等により、このままだと会の存続そのものがおぼつかない、と、次第に危機感が募った。

そこで、2012 年 8 月の第 54 回研究会では、改めて、「新メンバーを獲得しなくてはならない」「そのためにどうしたらよいか」を相談した。ポイントは「新人が入会しなければ、この研究会はそのうち解散せざるを得ないのではないか」そして「会の存続のためには新人の入会が必要」という従来からの話に集約された。しかし今までの通りであっては進展がないので、今後の方針として、以下の取り決めをした。

- ・次年度 (2013 年) の夏には、新人の獲得につながるよう、メンバー以外の人にも参加可能な形で研究会を開催する。
- ・そのためには、魅力的なトピックを用意して、ある程度宣伝することも必要。
- ・これができなければ会の解散を覚悟する。

これらを基本方針として、2013 年の 9 月の初旬の第 55 回研究会を企画した。

6 第 3 期

6.1 拡大研究会の開催

2012 年 8 月の研究会で、このままでは会は先細りになる、との危機感を強く感じ、会の継続について話し合い、その結果、やはり新人獲得のために打って出よう、という方針でまとまった。そこで、「拡大研究会」とい

う形で、本来の特許分科会のメンバー以外でも参加可能な研究会を企画した。

メンバー以外の人に参加してもらうためには、興味を持ってもらえそうなトピックスを用意する必要がある。そこで、その頃注目を集めていた「CPC 特許分類」を主テーマに取り上げて、ミニ講演会とそれに引き続くディスカッションの形を取り入れ、さらに、通常の研究会の雰囲気も知ってもらうために、メンバー各自による情報提供という、いつもの研究会で行っている部分も組み合わせることにした。また、新メンバーを募る機会でもあるので、旧来からのメンバーがそれまでの会の活動紹介を行い、新人勧誘の場となるよう企画した。

この「拡大研究会」は本来の特許分科会のメンバー以外であっても、誰でも無料で参加できる点がそれまでと大きく異なる。また、以降の研究会では、ISForum のメンバーでなくても、ISForum への入会を検討中の人には、特許分科会の活動の内容を具体的に知ってもらえるよう、トライアル的な参加を積極的に受け入れ、メンバーの拡大に努めることにした。ただし、もし ISForum 本体から会場費等の支援を受けることがあれば、ISForum の非会員のメンバーは特別会費などを徴収するなどしてバランスをとる、とした (注: ISForum は年会費を必要とする会であるため)。

このような「トライアル的な参加」を積極的に受け入れることにした理由は、入会資格の取得の機会が限られているためである。というのは、ISForum 特許分科会は ISForum の下部組織なので、ISForum 特許分科会へ入会するには、まず ISForum の会員である必要がある。一方、ISForum は INFOSTA の行う検索技術者検定の合格者でなくては加入できない。しかし、この検定試験は年に 1 回、11 月の下旬に開催されるのみである。この試験に合格しなければ ISForum の会員にはなれず、



従って、ISForum 特許分科会にも入会できない。このあたりが苦しいところである。

いずれにしてもこのような経緯で、2013年9月6日、第55回の研究会は「拡大研究会」として、すなわち、本来のメンバー以外でもだれでも参加できる形で開催したのである。準備期間がいささか短く、2013年8月になってからの広報であったが、とりあえず21名の参加者がおり、ますますの形で行うことができた。終了後は、例によって、名幹事による懇親会が行われたのはもちろんのことである。

6.2 拡大研究会後

拡大研究会の開催後、参加者に特許分科会への入会を

お誘いし、その中から3名の新規入会者を得た。開催頻度は年に4回程度、として、以降、2014年夏までに第56～58回を開催した。 拡大研究会、およびその後の研究会の内容を表3に示す。

研究会の会場は、筆者の当時の勤務先であった大阪工業大学を利用したり（その際にはゼミ学生も参加させてもらった）、また、第58回には話題提供も含めて、アイ・ピー・ファイン社にご協力いただいた。

その後、仕事の都合等での退会者もあり、2014年8月現在のメンバー数は18名である。

次回の第59回の研究会は、再び拡大研究会として行うべく、現在調整中である。また、今後も、年に1度程度は拡大研究会を開催して、新メンバーの獲得に努め、

表3 IS FORUM 特許分科会研究会開催記録—第3期

回	日時	テーマ
55	2013/9/6	【拡大研究会】 ①特許分科会の紹介 ②話題提供とディスカッション(1) ・欧米特許調査における特許分類の現状と活用～CPC導入の動きから～ ③話題提供とディスカッション(2) ・NewCSS (JP-NET) の活用 ④話題提供とディスカッション(3) ・IPDLのデータについて(出願人の名称変更に関して)
56	2013/12/6	【通常の研究会：メンバーからの話題提供と情報交換】 ①検索キーの使い方を事例から考える ②知財関連情報-1 著作権情報のリンク集 剽窃チェッカー ProQuestDialogの特許機能 ③(発表者の所属する企業について) 当社の概要と便利ツールについて ④PDF編集フリーソフトの紹介 ⑤オープンデータの定義とビックデータ・オープンデータの違い ⑥知財関連情報-2 CPCのその後の状況(CPCの最近のニュース、米国特許への付与状況など) Google Scholar Google Patents
57	2014/3/13	【通常の研究会：メンバーからの話題提供と情報交換】 ①紙情報の取り扱い ②Wayback Machine (Internet Archive) の紹介 ③Gmailなどのgoogleのサービス活用 ④・特許検索競技大会について ・特許情報関係の研究発表の場 InfoPro2014, PIUG, IPI-ConfEx等紹介 ⑤「知的資産経営」について ⑥外国特許情報について
58	2014/6/17	【通常の研究会：メンバーからの話題提供と情報交換】 ①astamuse 紹介 ②検索キーについて考える 第2回 ③ホームページの更新について ④欧米の特許情報関係の学会紹介 ⑤企業紹介、特許調査の効率化・活用ツール「THE調査力」(アイ・ピー・ファイン株式会社)
59	(予定) 2014/10/21	【拡大研究会の開催のため、現在企画検討中】

会の中心として活動してくれる若手がどしどし育ってくれることを期待している。

7 今後

長い間にはメンバーの部署移動や退職等の事情の変化もあり、自主的な勉強の場である研究会・勉強会を長く続けることは難しい。とはいえ、紆余曲折はあったにせよ、何とか 17 年間、この会を続けることができた。

長く続けるポイントは以下の点にあると考えている。

- ・メンバーの関心が薄れないように、新しいネタが適宜存在すること、あるいは見つけること。
- ・ある程度の頻度で連絡を行い、単なるニュースや問い合わせ、場合によりメンバーへの質問も含めて、ある程度の頻度で連絡を取り合うこと。
- ・新人確保をどうするか、を、常に念頭に。

今後、活動を継続・発展するには、INFOSTA の資格試験の合格者で ISForum の正規のメンバーのみに入会が許されるという、現在の ISForum 特許分科会の入会資格制限とは別の枠組みでの活動も必要かもしれない。たとえば、特許出願や研究開発や企画が主業務であるため、INFOSTA の資格試験とは距離があるが、業務上、特許調査は時々必要になる方、などが考えられる。また、旧来からのメンバーも、勤務先の部署移動や退職等で特許情報との関わりが薄れたために ISForum を退会したとしても、時々研究会にも参加いただき、過去の経験からのアドバイスをいただいたりすることもあってよいと思う。また、特に懇親会には気楽に参加していただき、先輩・後輩を含めた情報交換や同窓会的な場が用意できれば何よりと考えている。そういう方々が気楽に入会・参加できる特許あるいは知財情報調査に関わる情報交換の場を、ISForum とは別の枠組みで新規に立ち上げることも視野に入れて、現在検討中である。

8 おわりに

通常の定例研究では、内容は、メンバー相互の「小ネタ持ち寄りの情報交換会」という形が主である。気楽な

ちょっとした小ネタを持ち寄り、お互いに情報交換をする場があると仕事にも大変有用であり、また励みにもなり、世界が広がるきっかけになる。

また、ISForum の枠組みとは別の、今後の新たな活動も模索中である。このような活動に関心のある方からご連絡をいただければ大変嬉しい。

参考文献

- 1) 情報科学技術協会 (INFOSTA) <http://www.infosta.or.jp/>
- 2) サーチャーの会 <http://www.searcher.gr.jp/>
- 3) ISForum <http://www.isforum.jp/isforum.html>
- 4) JST <http://www.jst.go.jp/>
- 5) INFOPRO2014 <http://www.infosta.or.jp/symposium/infopro2014hapyobosyu.html>
- 6) (株)サピエンティスト <http://www.sapientist.com>
- 7) アイ・ピー・ファイン(株)<http://www.ipfine.com/>
- 8) 情報科学技術協会 その使命と活動 http://www.infosta.or.jp/infosta_panf.pdf
- 9) 検索技術者検定 <http://www.infosta.or.jp/examination/>

